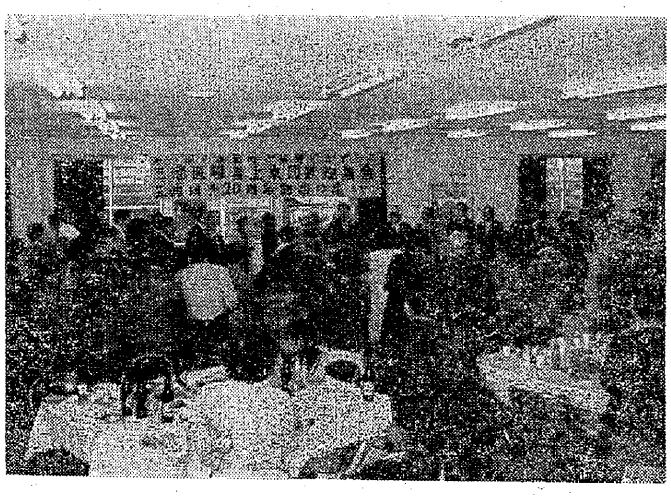
旅行団迎え、涙と涙のつどい

三池闘争思い出し感激

関東不知火会が記念集会

関東不知火会（三池炭鉱退職者が結集。相浦和弘代表）企画の「三池闘争二十周年記念のつどい」は、折から上京中だった三池退職者旅行団（末石勝之団長。五十人）を迎え、九月二十八日夜東京地評会館で盛大に催された。

この夕関東不知火会は約六十人が集まって三池からの旅行団を迎え、準備されていたテーブルに、出身鉱所別に分かれて着席。ビールを汲み交わしながらお互い同志久闊をよろこび合い、三池闘争後二十年にわたって、それぞれに闘い、歩いてきた道を感慨深くふりかえり、今後はさらに、今も胸のなかに燃えている三池魂をもとに闘い続けることを誓い合った。



折から上京中の三池退転者東京旅行団と一緒になつて、関東不知火会が催した〝三池闘争20年記念集会〟祝賀。ともに盃を汲み交わしながら、しばし感激の語らい。どうして忘れられよう。

×

その日旅行団は、会場近くの田町駅に降り立った。

ホームを一歩出ると、目ざす真向いの東京地評会館には、幾条もの赤旗が風になびいているのが視野に飛びこんだ。

それに、駅頭には不知火会会員の出迎えも……。「観迎の赤旗です」と聞けば、突然たえようのないなつかしさとともに涙が吹き出してき、言葉がつまってしまった。

会場にはさらに多くの不知火会員――かってともに三池闘争を闘った仲間（主婦も含め）たちが待っていてくれた。感激だった。

つどいはやっぱりここでも、スクラム組んで「炭掘る仲間」（三池労組組合歌）の合唱で開幕。いろんな人びとのあいさつの一つひとつが、胸に感動を呼び起こし、改めて「三池労組の今日があるのは、家族ぐるみの闘いのおかげ」であることを、しみじみとかみしめた。

盃を重ねるうちにかくし芸の交流が、いっそうみんなの心を一つに結びつけ、そして最後をあの「がんばろう」の歌の合唱で閉じたのだったが、関東不知火会は旅行団一人ひとりにシャープペンシルの記念品まで贈り、健康を祝福した。

同不知火会は右の催しとは別にこの日三池闘争記念品の展示も行い、一般都民や労働者の観覧に供したが、ここにつどった関東不知火会会員と、旅行団一人ひとりの胸のなかには、この夜の感動がきっといつまでもいくことだろう。

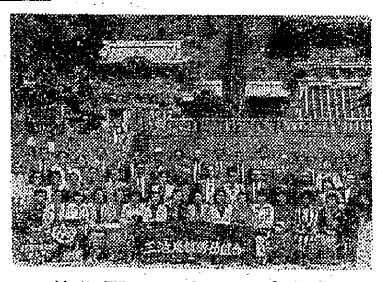
つつがなく帰牟

退職者東京旅行団

今年七回目を迎えた〝退職者東京旅行〟は終った。

今年参加したのは五十人。九月二十五日バスで大牟田を出発、そして十月一日つつがない旅を終え帰ってきた。

旅行団は例年の通りフェリーで小倉港から大阪に着くと、いよいよ大阪―奈良―京都、そして東京―日光―鬼怒川と遊び、羽田から飛行機で福岡までひと飛び。皆元気だった。その間、関東・関西両不知火会と交流。旧交を暖めた。



旅行団、そろってパチリ。

革新の力で平和守ろう

県民大集会で固めた決意

福岡

福岡県評（宮園静雄議長）は五日午前十一時から福岡市内の須崎公園で「反動化阻止、憲法擁護、平和と生活を守る県民集会」を開き、「民主勢力とともに団結を固め、反動攻撃と対決、生活防衛のために闘い抜く」決意を固めた。

集会には、労働者を中心に約七千人が集まった。（三池労組からは宮川澄雄さんら三十人が参加）

社・共両党代表も顔をつらね、集会終了後、全参加者が市内の中心通りをデモ行進して訴えた。

「危険な反動の時代が到来しているとき、労働者に対するあらゆる攻撃をはね返し、革新の強まる力で平和を守らなければならない」（宮園福岡県評議長）

大牟田で反戦、平和のつどい

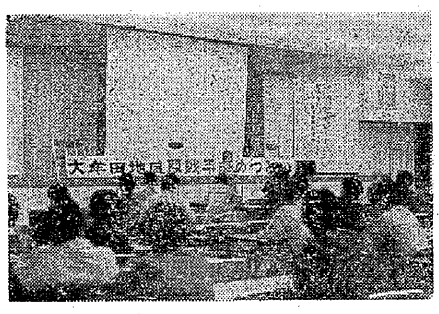
七日夜、大牟田地評は労働福祉会館で「大牟田地区反戦・平和のつどい」を開催した。五百人近くの市民が集まった。

かねて福岡県総評が、「戦争体験の風化が憂慮されているとき、語りべ運動を通して反戦・平和の輪を広げていきたい」として、戦争体験の語りべ運動を提唱しているが、この夜の催しはそれにこたえたものだった。

集まった人びとを前に、長崎の原爆被爆者や大牟田の空襲体験者たちが立って語り、かけつけた人びとも耳をそばだてて聞きいっていた。

特に太平洋戦争中、小学校の教師をしていたという堺ノエさん（72歳。大牟田市上百川）は、ときには声をつまらせて語った――

「夜間、空襲警報が鳴ると、家をほったらかしにして学校にかけつけた。たとえわが家は空襲で焼けても、天皇の御真影を守らなければならなかった。そんな空襲があった翌る日帰って見ると、家は焼け落ち、家族は死んでしまっていて、一夜でたった一人になってしまった先生もいた」



大牟田のつどい

まぎまぎと当時のことがしのばれ、しぜん集まった人びとの胸に反戦・平和の誓いが固まった。

大牟田のつどい

南筑後ブロックが反戦デー

十月二十一日（火）午後五時三十分から、柳川市民会館で「一〇・二一＝反戦デー南筑後ブロック集会」が、地区労南筑後グロック主催で開かれる。

集会には特に著名な軍事評論家の藤島宇内さんを招き、「政治反動と八〇年代」という重要なテーマでの講演も予定されている。

荒尾に〝革新市政〟を

門田候補を当選させよう

「革新市政」を自民党に奪われて以来今日まで、「再び革新の手に市政を」という視点から、荒尾の市長選は闘い継がれてきた。

とりわけ昭和五十二年（一九七七）一月の市長選は、「全野党（保守の一部も含んだ）共闘」態勢で〝門田作〟氏を候補に擁立して闘い、二千百九票という少差で惜敗したが、得票数の一万六千七百九十三票はこれまでの革新票を大きく前進させ、また運動のあり方も、自治労の積極的な共闘体制とあいまって、大きな前進を示した。

この闘いで得た大きな成果は、その後の各級選挙の基盤となる地校協の地域における政治地図を作り上げたことで、このような市長選挙闘争の成果が、各校区協議会の日常活動として地域に発展した。

来年一月～二月にかけて荒尾市で施行される市長選挙に、前回の選挙闘争総括の中から再び、門田作候補で闘うことを決定したが、特に今回は前回の不十分さを乗りこえた闘いを組みあげ勝利しなければならない。そのために、前回の選挙後ただちに発足した社会党熊本県本部及び同荒尾総支部と、熊本県総評並びに荒地評、また自治労県本部と荒尾市職労によって構成されている「六者共闘会議」は、鋭意対策を協議しながら今日までにいたっている。

社会党も県総評も、保守王国の熊本県下で、革新市長実現の最短距離にあるのは「荒尾市以外にはない」という視点から、全県的な闘いとして位置づけることを意志統一、具体的行動が組織されている。

現地の荒尾でも、市長選を勝利し、〝革新市長実現〟に向け、①党組織の強化（市民や組合員に信頼される党員作り）、②校区協議会の組織強化、③市長選に臨む政策作り、④革新市長実現に向かって教宣活動の強化、などで闘いを一つひとつ積み重ねている。

すでに同候補の推薦を決定している組合として、こんどこそ市長選に勝ち、荒尾に革新市政を打ちたてなければならぬ。

（右の記事は政治局提供）

これからもがんばって……

はげまそう、故中田さんのご遺族を

職場四分会（四山）の中田勝さんは、去月一日、まだ四十歳という若さで逝去されました。残念というほかありませんが、このほど未亡人となられた妻の芙美さんから、ご懇篤なお礼状を組合に寄せていただきました。

お手紙の初めに、「一葉落ちて天下の秋を知る、というさびしい季節を迎えました」としたためておられますが、ご心中お察しいたします。

ほんとにご不幸でしたが、組合員や家族もいることですから、どうかこれからがんばってくださることをお祈りいたします。

なかま

職場五分会（四山）

今井　楠夫さん

▼…今井さんは昭和二十四年一月四山鉱入社で、すでに三十年間坑内で働きつづけていられます。

入社以来小切羽採炭ひとすじであり、現在は開発常一番で働いていられますが、三池闘争後の苦労話など聞くと大変だったとのこと。

闘争中は、福社四分会の地域で機動隊の隊員として頑張っておられましたが、若いときからオートバイが好きだったよしで今日でも通称「ナナハン」で通勤されています。

▼…昨年長洲町に新居を求められ、妻の房子さんと一男一女それに一男とその妻との間に恵まれたお孫さん二人、計六人家族というなごやかな日常です。

▼…しかし、いままでが闘いの連続、差別の連続で、さぞかし大変だったと思いますが、それには妻の房子さん（三池主婦会）の支える力があったからだと思われます。

趣味は釣りに庭木など。でもいまでは、お孫さんと川での鮒釣りなどがもっぱらで、「孫の

今井さんは54歳。熊本県玉名郡長洲町大字長洲270―4に居住。家族6人暮らし。

宮崎　勝（四山）＝記

×　×